

絶望から希望へ

小倉 一純

窓に目をやると、道路には車が一台とまっていた。金属のポティーが夏の朝日に輝いている。

ほどなく若い男女がやって来て、その赤のスポーツセダンは表通りへと向かって出ていった。四階の四人部屋のベッドで迎える初めての朝である。すると看護師がやってきて、これからのことを伝えるという。入院生活の注意事項などである。

僕は、初夏の日差しに照らされた窓の外を眺めながら、いつかこのことを文章に書き起こすことができたら、と思っていた。鉄格子を通して、直下の路地にいる楽しげな若い男女を見たときの、あの絶望的な気持を――、である。僕はその思いをひとりごとのようにつぶやいたのかもしれない。

「なに作家みたいなことしているの……」

白い制服の彼女のささやきが聴こえたような気がした。

三十歳を目前に控え、僕は精神科病棟に入

院した。もう三十四年も前の話である。

一九八四年に大学を卒業して、僕は製鉄会社に入社した。新入社員研修も終わり、秋になって工場の経理課に配属された。そこで一年半が過ぎたころ、心に不調を覚えるようになった。現場の原価計算係という職場でのストレスが原因だろう。他人に悪口をいわれているような気がする。人目も気になるようになり、空恐ろしくて外もおちおち歩けない。

「おい、あれがいつも間違った予算表を出してくる、小倉だぞ」

「あっ、ほんとだ、ほんとだ」

朝食が済むと早速、投薬が始まった。ナースステーションの前で自分の順番が来ると、上を向いて口を開ける。そこへ看護師が散剤やらいくつもの錠剤を、薬包から一挙に放り込む。目の前の小さな透明カップの水でそれらを胃に流し込む。それからまた上を向いて、空っぽになった口の奥を看護師に見せる。そんなことを食事のたびに繰り返した。

三日目にはひどい便秘になっていた。精神科の薬には抗コリン作用というのがあり、胃腸の働きが緩慢になる。これで僕も一人前の精神病患者になった、と思った。

ナースステーションの前は広い共用スペースになっていて、そこにはテーブルが置かれていた。僕らはここで三度の食事をとる。テレビや長椅子、灰皿もあって、患者は一日の大半をこの空間で過ごしていた。

気がつくくとテーブル脇のグレーの床で若い男女が転がるようにして抱き合っている。二人とも躁^{そう}状態で気分が高ぶっていた。彼らは激しく腰を振り性行為の真似事に興じている。聞けば、彼は大企業のサラリーマンで、彼女は大学生だった。彼らに悪意はないが、理性という仮面をはずした人間はただの動物である。

彼は、僕よりひとつ年下だった。有名私大の文科系を卒業して、そのころ世間の注目を集めていた上場企業の、銀座の本社に勤めていた。彼は三十歳手前ながら、一千万円近い年収

を稼ぐのだという。その話を真顔のときの彼に散々聞かされた。彼は、双極性障害である。当時は躁うつ病といわれた。入社してから二度目の発病なので、退院後は、会社に辞表を提出するつもりだ、と彼はいった。その彼に僕は怒まれることになる。

彼と大学生の彼女が目の前で抱き合っているときに、僕はそれを半ば軽蔑の眼差しで見つめていた。僕は配慮に欠ける男だったから、そんな自分の表情を隠そうともせず、侮蔑の言葉さえ口走っていたのだ。彼はそのことをハッキリと覚えていたようだ。

その後、同じ病院の外来でばったり顔を合わせたとき、最後に彼がいった。

「あなたはひとにお愛想のひともいえないじゃないか。そんなんじゃないやダメだよっ」

仇かたきを討たれたな、と思った。僕は、精神科病棟でもお世辞ひとついえない男だった。

入院患者の中には、五十代の働き盛りの世代もいた。僕が話したその男性は、親しい友人

との金銭貸借で裏切られたショックが引き金となり、発病したのだという。以前にも精神科の病歴があると打ち明けていた。

僕より若い連中、例えば大学生のグループだと、親を殴った話などは、ごく当たり前に口にする。精神科に入院している若者には、今でいう共通の「世界観」があるように思えた。

「おれさ、先週、お袋を殴っちゃってさあ」

大学生の彼がいうと、回りの同年輩の女性たちも「うんうん」、と当たり前のようにそのことを受けとめる。こういう世界もあるのだな、と僕はそのときつくづく思った。

そんな彼女らの中には、自傷行為の常習者がいた。とにかく彼女はいつも死にたいと思っていて、プリンのプラスチック製の容器などを壊して、その角で手首を切る。それを毎度、精神科の女性医師が丁寧に縫う。これは年中行事のようなものだった。そんなことが、当たり前のように行われているところが、精神科病棟だった。

大学受験に失敗して、そのまま長期入院、という若者も奥の大部屋には何人もいた。この病院の近くにある薬局の子息の話である。彼は受験に失敗し、統合失調症になってこの大学病院に入院した。症状の激しいときをここでやり過ごし、自宅に戻った彼だったが、ときどき「もう一度、大学受験がしたい」と漏らすことがあるという。父親は、

「あの惚ぼけた様子じゃ、もうどこの大学にも受からない。かわいそうで仕方がないが、親である自分か、兄弟が彼の面倒を見て、一生、飼いきれにしておいてやるより他に方法がない」

と肩を落としていた。これは、「君たちはまだ望みがあるじゃないか」という入院中の僕らに対する励ましであつたのかもしれない。

この当時から、これからは精神疾患の患者が増えると、様々な分野の専門家が警鐘を鳴らしていた。果たせるかな、現在はそんな世の中になってしまった。

精神科の病気のうち、統合失調症による「妄

想」や「幻覚」は、患者本人にとっては、生まれて初めての「異常体験」である。普通の人では、そこまでの感情や感覚を実感として理解することは難しい。

統合失調症の場合は、昨日まで信頼していた両親を、翌日はまことしやかに疑いの目で見られるようになる。僕自身の体験である。「苦労は買ってでもしろ」という言葉があるが、異常体験の苦労だけは買わない方がいい。一度、そういう経験をしてしまうと、症状が軽くなっても、決して以前と同じ状態に戻ることにはできない、と僕は思う。記憶が心に残るからだ。これは戦争体験なども同じであろう。

精神科の入院病棟では、朝起きて、掛布団のカバーやシーツなどをみずから交換する決まりになっていた。最低限の生活意欲や習慣を維持するためである。

精神科病棟の食堂も兼ねた共用スペースに出るときには、パジャマから外出着に着替える決まりもあった。生活にメリハリをつけ、生

きる意欲を失くさせないためである。ずぼらな僕がスウェットのまま一日中過ごしていたところ、誰にも注意されなかったから、それが習慣になった。あるとき、共用スペースで僕を問診中の担当医が持つカルテを盗み読みしたら、「着替えをしなくなり、人格崩壊が疑われる——」と書かれているのが分かった。僕はギョツとした。それから毎日必ず外出着に着替えるようにした。

入院中の欲しい物は、外出許可組の仲間と同行する看護師が購入してきてくれる。その彼らは、経過もよく、医師や看護師のいうことにも逆らわない。医療従事者と患者との間には、ある種の主従関係があることに気がついた。僕の生身のプライドに何かがぐざりと刺さるのを感じた。

結局、板橋の大学病院で二か月の入院生活を送り、ようやく実家に戻ることができた。

そのころ、僕には六歳年下の彼女がいた。彼女は製鉄会社の同僚である。その彼女とは、結

婚も意識するようになっていた。だが、退院後は彼女といっても心がときめかない。自分でも驚いた。病気の影響だろう。悩みぬいた揚句、僕は彼女を手放すことにした。そんな独りよがりな決断を、彼女はどう思ったのだろうか。その後、会社に辞表を提出した。これですべてがゼロになった、と思った。

それから僕は二度の転職をし、製鉄会社も含め、三つの会社を渡り歩いた。どれも通常の正社員採用だった。だが僕は二〇〇〇年を迎えた四十二歳のとき、その会社員人生にピリオドを打たざるを得なくなった。無理が高じて病気が再燃したのだ。休日も返上でわが身を削ったのが災いしたのか、結局、健康で平凡な人生を取り戻すことはできなかつた。この世に神も仏もあるものか、と僕は恨んだ。

それからは近くの精神科に通い、自宅で療養生活を送っていた。その十五年のうち五十歳を過ぎたころには、僕には発達障害のあることが判明する。

発達障害の人は、普通の人とは違った物の考え方をする。世間との軋轢あつれきが生じ、それが生きづらさにつながる。そんなわけで、発達障害の人は二次障害を背負うことが多い。僕の場合それは統合失調症という形になって現れた。板橋の大学病院に入院したときにも、恐らく、その症状が現れていたのだと思う。当時、医師は診断書に病名を記載しなかった。

僕は五十七歳で奮起して、現在は中学時代からの夢である作家を目指している。エッセイの同人が主催する文学賞に応募したのが縁で、その仲間に加えてもらった。その後、優秀賞とまではいかなかったが、いくつかの文学賞も取ることができた。もしこの世に神や仏があるのなら、同じ病に苦しむ同胞たちにも、生き甲斐のある人生を賜ることを、僕は願う。

数年前還暦を迎えたが、今度こそ幸せをつかみたいと神仏にもすがる思いだ。僕は、これから希望に向かってラストスパートをかけるつもりである。了